

杜甫における「懶」と「拙」

安東, 俊六
岐阜大学教育学部 : 助教授

<https://doi.org/10.15017/9757>

出版情報 : 中国文学論集. 11, pp.80-98, 1982-10-01. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

杜甫における「懶」と「拙」

安 東 俊 六

序

乾元二年十月、秦州から成州同谷へ向った杜甫は、「發秦州」詩を「我衰へて更に懶拙 生事自ら謀らず」と詠いだしている。この詩は、生活が不如意でしかも俗事には煩わされる秦州を後にし、生活もいくらかよさそうので、氣候も温暖、山水の美も樂しめるといふ同谷に移ろうと決意したことを詠ったものである。

いうまでもなく、「懶拙」とは、杜甫が何事によらずものぐさな自分の性格と、自己の營爲の拙さを表現した用語に他なるまい。

ところで、杜甫の詩を通覽してみると、「懶」「拙」の用字がきわめて多いのに驚く。ざっと機械的に檢出しただけでも、「懶」字が二九例、「拙」字が二六例を數える。その用字の多用ぶりは、同時代の詩人もしくはそれ以前の詩人達には、およそ比類を見ないほどに突出した注意を引く多用ぶりである。因に李白の用例を見てみると、「拙」字が六例、「懶」字が三例にすぎない。

もつとも用字の數が多いからといって、特に意義があるというのではない。問題は他にある。なるほど、「懶」
「拙」とは、ものぐさな性格や營爲の拙さを言つたものに違ひなからうが、しかし、それは、單に、杜甫のものぐ
さな性格や處世のまずさを詠っているといった表層的な意味だけにとどまらず、更に本質的なものとして、杜甫を
詩作にかりたてたものは何であつたかという問題とも、深い關りをもっているものであるように私には思われる。
したがつて、小論は、杜甫が詩中に多用する「懶」「拙」の用い方の検討をとおして、それが杜甫の詩作とどの
ような關りをもっているのかということについて、述べてみたいと思う。

—

杜甫の用いる「懶」は、世俗にこだわらず、本性にしたがつて無碍の世界に自適しようとする自己を積極的に主
張しているものが多い。

未暇泛滄海 未だ滄海に泛ぶに暇あらず

悠悠兵馬間 悠悠たり兵馬の間

塞門風落木 塞門風木を落し

客舍雨連山 客舍雨山に連る

阮籍行多興 阮籍行きて興多く

龐公隱不還 龐公隠れて還らず

杜甫における「懶」と「拙」(安東俊六)

東柯疎疎懶 東柯疎懶を遂げん

休鐸鬢毛斑 鐸むを休めん鬢毛の斑なるを

この詩は、「秦州雜詩」連作二十首の第十五首である。乾元二年秋七月、華州司功參軍の職を擲つて秦州に至つた杜甫は、生活は、以前に比すればはるかに不如意ながらも、ここ數年來の宮仕えの氣苦勞から解放されて、氣までも自由な身の喜びをかみしめ味わうゆとりを持つことができていた。秦州での詩にはそのさまがくり返し詠われており、この詩においても、そうしたものを伺うことができる。

車に乗って出かける散策にあたっては、かの阮籍が、出かけては途窮つて慟哭して歸つたというように、輿の多い遠出を楽しみたいものだといひ、東柯谷に居を卜して住みつこうとするのは、後漢の隱士龐徳公が、妻子をともなつて鹿門山に隱棲したように、世俗との交わりを斷つて安棲したいのだといふ。そして、ごま鹽の鬢毛を切るのもやめてのびるにまかせ、東柯谷を積康が鍛えたという山陽の地に見たてて、疎懶の本性のままに生きていきたいと詠い結んでゐる。

杜甫が、阮籍の放逸な生き方に共感し、龐徳公の超俗的隱棲に限りない憧憬を抱いていたことは、彼の詩の隨所にそのあとを見出すことができる。「阮籍焉んぞ禮法の疎なるを知らんや」（「奉酬嚴公寄題野亭之作」寶慶元年の作）とか、「茫然たり阮籍の途」（「早發、射洪縣南途中作」寶應元年十一月の作）、「蒼茫歩兵哭す」（「秋日荆南述懷」詩・大曆三年の作）などのように、しばしば自らを阮籍になぞらえて詠い、「遺興」五首・第二首（乾元二年、秦州での作か？）では、「昔者龐徳公 未だ曾つて州府に入らず 襄陽耆舊の間 處士節獨り苦しむ 豈に時を濟ふの策なから

んや終竟に羅罟を畏るのみ 林茂れば鳥の歸する有り 水深ければ魚聚るを知る 家を擧げて鹿門に隠れ 劉表焉んぞ取るを得んや」と龐徳公をとりあげて詩一篇に詠っている。殊に龐徳公の超俗的安棲に對して強い憧れを抱いていたことは、ここに掲げた連作五首の「遣興」詩第二首のすぐ次の第三首が、陶淵明の處世に俗臭を感じて、「未だ必ずしも能く道に達せず」とすこぶる批判的で、第二首とは對照的であることから明らかである。いうまでもなく、第三首に詠われる陶淵明批判は、單に陶淵明を批判したというだけではなく、杜甫自身が自らの内面に巢くうぬぐいきれぬ俗氣をとりあげて、自己批判したという面もあるであろう。さすれば、尙更に第二首に詠われた龐徳公への憧憬ぶりが、一段と鮮かに浮かび上ってくるのである。

「疎懶」とは、嵇康の「與山巨源絶交書」の「性復た疏懶」をふまえての用法であろう。周く膾炙された杜甫の詩句「惡を嫉みて剛腸を懷く」（「壯遊」詩）も、絶交書の「剛腸にして惡を疾む」を襲った用語であつて、杜甫が嵇康に時代を越えて私淑していたことは、これもまた、彼の詩の隨所にそのあとをうかがうことができる。「我は師とす嵇叔夜」（「入衡州」詩、大曆五年四月の作）という詩句は、就中、もっともそれを端的に示した直接的な表現であらう。「疎懶」が「絶交書」を襲った用法であり、しかもその前の第五・六句が、阮籍・龐徳公の如く本性にしたがう生活を樂しみたいと詠っているのであるからには、いまさら改めて言うまでもなく、「疎懶」とは脱俗的な氣質を讚美した自己主張の表現である。「疎懶名の爲に誤られ 驅馳して我が眞を喪ふ」（「寄張十二山人彪」詩・乾元二年秋の作）といい、「疎懶意何ぞ長き」（「西郊」詩・上元元年冬の作）、「近く識る峨眉の老 余が懶是れ眞なるを知る」（「漫成」二首・第二首）・上元二年春の作）、「懶性從來水竹に居る」（「奉酬嚴公寄題野亭之作」・寶應元年の作）、「懶漫頭

時に櫛する」(「傷秋」詩・大曆二年秋の作か?)などといい、いずれもそうであろう。

これらの用例が各々語るように、杜甫の用いる「懶」字は、自らの性格をもぐさだといいつつも、そこには、俗事にかかずらわず、本性にしたがって、無碍の世界に自適しようとする、脱俗の隱士としてのほこりに充ちた主張を込めている場合が多いのである。

一方、「拙」はどうであるかというに、「屏跡」三首の第二首(寶應元年の作)をみてみよう。

用拙存吾道 拙を用て吾道存す

幽居近物情 幽居物情に近づく

桑麻深雨露 桑麻雨露深く

燕雀半生成 燕雀半ば生成す

村鼓時時急 村鼓時々急に

漁舟箇箇輕 漁舟箇々輕し

杖藜從白首 藜を杖つき白首に従ひ

心跡喜双清 心跡双つながら清きを喜ぶ

寶應元年、浣花草堂での生活も落着いてきた頃のさまを詠った詩である。桑や麻は雨露の恵みを充分にうけて勢いよく伸び、燕や雀の雛も半ばは巢立つほどに生長したと、自然の大きなめぐりの中に、萬物の齊生・調和をみとめて、自らをもその中に投じて順應していこうとする姿勢がうかがえる。ここにあって、「拙を用て吾道存す」とは、

「拙」を世渡りが拙いという後退的な姿勢としてとらえるのではなく、逆に、拙こそ本性にしたがった生き方であり、こうした生活こそ、各々の事物のところに近づくことができるのであると、積極的にとらえようとしている。

「屏跡」詩から三年後の作だと考えられる「營屋」詩を見てみよう。

我有陰江竹 我に陰江の竹有り

能令朱夏寒 能く朱夏をして寒からしむ

陰通積水内 陰は通ず積水の内に

高入浮雲端 高く入る浮雲の端に

甚疑鬼物憑 甚だ疑ふ鬼物の憑るか

不顧剪伐殘 顧みず剪伐の殘を

東偏若面勢 東偏面勢に若ひ

戸牖永可安 戸牖永に安んずべし

愛惜已六載 愛惜すること已に六載

姝晨去千竿 姝の晨に千竿を去る

蕭蕭見白日 蕭々として白日見はれ

洶洶開奔湍 洶々として奔湍開く

度堂匪華麗 堂を度るは華麗に匪ず

杜甫における「懶」と「拙」（安東俊六）

養拙異考槃 拙を養ふは考槃に異なる

草茅雖雜茸 草茅雜茸すと雖も

衰疾方少寛 衰疾方に少しく寛なり

洗然順所適 洗然適ふ所に順ふ

此足代加餐 此れ加餐に代ふるに足る

寂無斤斧響 寂として斤斧の響き無くんば

庶遂憩息歡 庶はくは憩息の歡を遂げん

この詩は、草堂を營んで植えはじめた竹が、「愛惜すること已に六載」というのであるから、永泰元年正月以後の作であるが、この頃の杜甫はまた草堂にひきこもっていた。嚴武の情誼に報いるために勤めはじめた節度參謀の職も退いていたようである。同僚との軋轢が原因であったか、嚴武の待遇が氣に染むほど篤いものでなかつたためか、勤務する意欲は失って、正月三日に草堂に歸つてからは、再び幕府へもどろうとしない。宮仕への息苦しさや不快な思いを幕下で存分に味ってきた直後だけに、氣ままにふるまいたいという欲求も強く、それが達せられることへの喜びは、一入大きかつたようである。「洗然適ふ所に順ふ 此れ加餐に代ふるに足る」と、心に適つた生活を樂しめることが、年につれて衰え病いに冒された體に、食事がすすむより更にききめがあるようにさえ覺えている。ここに用いられる「養拙」の語も、考槃とは異なると言つて遜辭を添えつつも、やはりそれが本性に適合した生き方であることを主張したものである。ことわるまでもなく、「養拙」は、文選卷十六の潘岳の「閑居賦」

の末尾「衆妙を仰いで思いを絶ち、終に優游して拙を養ふ」をふまえた用法であつて、杜甫の拙を養うという生き方は、「閑居賦」への共感に深く根ざしている。「潘生雲閣遠し」(「寄劉峽州伯華使君」詩・大曆二年の作か?)や「官序潘生拙なり」(「秋日寄題鄭監湖上亭」詩・第二首・大曆二年秋の作)など、自らを不遇の生涯を終えた潘岳に比するの
は、その共感に基づくものである。

上來見てきたように、杜甫が、自らの性格を「懶」だと稱して、自己のものぐさな性格を是認しほこらかに主張するとき、杜甫の心底には嵇康に寄せる限りない共感があり、自らの營爲を「拙」だと稱しつつも、それが本性に適合した生き方であると主張するとき、そこには潘岳の「閑居賦」への共感が裏うちされているのである。

「懶」字や「拙」字が離俗の主張を込めて詠われているように、杜甫は、終生折にふれ、くりかえし自ら離俗の志向の強いことを詠いつづけている。李白と遊んで、「向來橋頰を吟ず 誰か與に尊羹を討めん 簪笏を論ずるを願はず 悠々たり滄海の情」(「與李十二白同尋范十隱居」詩・天寶四載の作か?)と詠っていることは、周知知られているとおりであり、宿願の中央官界の職を得た後も、時に職務に勵む勤勉さを示しつつも、その一方では職務に倦んで曲江のほとりをさまよい、大雲寺に贊公をおとのうては、「艱難世事迫り 隱遁佳期に後る」(「大雲寺贊公房」詩・第四首)と述懐している。華州司功參軍に遷されて後は、ひたすら職務を雑事として嫌悪し、やがてその職をなげうって秦州に至るのであつて、秦州では既に掲げたごとき離俗を贊美した詩を精力的といえるほどに多作している。成都草堂では、離俗の志向は更に色濃くなって、作られた詩の大半にその影がうかがえるといつても決して過言ではあるまい。「寄題江外草堂」詩(廣徳元年の作)の詠い出し「我生まれて性放誕 雅に自然に逃れんと欲す 酒を

杜甫における「懶」と「拙」(安東俊六)

嗜み風竹を愛し 居を卜すれば必ず林泉」は、それをもっとも直接的に表現した例であろう。夔州に至っても離俗の願いを詠い續けることは成都時代と變つていない。「荆扉麋鹿に對し 應に爾と共に羣を爲さん」〔「曉望」詩・大曆二年の作か?〕や、「牧童斯に眼に在り 田父實に隣を爲す」〔「從驛次草堂後至東屯茅屋」詩第二首・大曆二年秋の作か?〕など、隨所にこうした表現がみられる。

杜甫の離俗の願望は、時に神仙世界・佛教の悟りの世界への憧憬として表現されたり、また時に山澗・田園に退居することこそ本性に従う道であるとして表現されるけれども、様態や欲求の強弱の差違はあつても、生涯に涉つて強く抱き續けられたことは、否定しがたい事實である。

二

ところで、前節に述べてきたように、杜甫に離俗の願望が強く、「懶」・「拙」字にも離俗の主張が強く込められているとは言つても、杜甫の用いる「懶」字「拙」字の全てがそうであるかというに、決してそうではない。全く趣を異にした用い方もあるのである。

先に掲げた詩句「我衰えて更に懶拙 生事自ら謀らず」の「懶拙」は、自らに離俗の志向の強いことを誇らしく主張した用法だとは受けとれない。主張とはむしろ逆に、「自らの性格あるいは處世の仕方の缺點として、「懶」「拙」を後退的否定的な意味で用いているといつてよい。

杜甫の用いる「懶」字「拙」字の用い方を各々検討してみると、「懶」字には、總じて主張を込めた用い方が多

く、それも秦州・成都の頃に多用しているのに對して、「拙」字は逆に否定的な用い方のほうが多く、秦州・成都の詩にはほとんど用いていない。この用い方のかたよりから、「懶」字と「拙」字の性格の違いは、自ら明らかである。大曆二年暮春の作になる詩「暮春題漢西新賃草屋」詩第二首では、次のように詠っている。

此邦千樹橘 此の邦千樹の橘

不見比封君 見ず封君に比せらるるを

養拙干戈際 拙を養ふ干戈の際

全生麋鹿羣 生を全うす麋鹿の羣

畏人江北草 人を畏る江北の草に

旅食漢西雲 旅食す漢西の雲に

萬里巴渝曲 萬里巴渝の曲

三年實飽聞 三年實に聞くに飽く

「養拙」が、離俗を主張している場合には、潘岳の「閑居賦」を襲った用法であることは前節に述べたとおりである。しかも「拙を養ふ干戈の際」の後句は、「生を全うす麋鹿の羣」というように、離俗の意志を表わすにあたっては、常套的なものともいえるような表現を用いて、首・頷聯ばかりをとり出せば、この詩も離俗の主張であるかに見える。しかし頸・尾聯に「畏人」、「旅食」、「萬里」の語をたたみかけて、この地の民謡も三年聞いているかきたと詠えば、この詩の訴えるものは客寓の身の寂寥感と望郷の一念であって、それが首・頷聯をも壓して覆いつ

杜甫における「懶」と「拙」（安東俊六）

くしてしまっている。先掲の「營屋」詩の草堂における安棲のさまを格調高く詠おうとしたのとは、極端に異なるものといわねばならない。この詩は五首の連作であるが、他の四首のいずれもが悲愁に充ちた詩であって、末尾・第五首の尾聯は、「落日江漢に悲しみ 中宵淚牀に滿つ」と結ばれてさえている。この詩において、いかに「閑居賦」を襲った「養拙」の語を用いようとも、それは、積極的な主張だとして響かないばかりでなく、否むしろその反作用として、そう主張することで自らを容認するしか慰撫すべき手段を持たないという孤絶ぶりのみがうきぼりにされてくる。

同じく夔州での作と考えられる「遣愁」詩でも、

養拙蓬爲戸 拙を養ひて蓬を戸と爲す

茫茫何所開 茫茫何の開く所ぞ

江通神女館 江は通ず神女館

地隔望郷臺 地は隔つ望郷臺

漸惜容顔老 漸く惜む容顔の老ゆるを

無由弟妹來 弟妹の來るに由無し

兵戈與人事 兵戈と人事と

回首一悲哀 首を回せば一に悲哀なり

と詠っている。詩題から「愁を遣る」と題することく、この詩は、客寓の身の悲哀を詠ったものである。しかも

この詩は、「春春題漢西新賃草屋」詩・第二首に比して更に孤絶の色が鮮明である。詠い出しこそ「養拙」を用いるものの、第二句からはやくも「茫茫何の開く所ぞ」と愁いを詠い出すための表現に轉じて、ここは異郷の夔州の地、東に巫山の神女館、西には遠くはるかに成都の望郷臺、客寓の身では容顏の老ゆるのを惜しむばかり、弟や妹のこの地に來る手だてもない、兵戈といい人事といい、ひたすら悲しいことばかりであると詠う。ここにあって、「養拙」がもはや積極的な主張を含みえないのは當然である。

「懶」字が、主張を含んで用いられることの多いことはすでに述べたが、その「懶」字も「拙」字と熟して「懶拙」と熟語になると、否定的な影がさして、誇らしく主張した用法としては用いていない。「發秦州」詩の「我衰えて更に懶拙 生事自ら謀らず 食無くして樂土を問ひ 衣無くして南州を思ふ」というのがそうであり、「發同谷縣」詩の「平生懶拙の意 偶ま棲遁の跡に値ふ 去任願ひと違ひ 仰ぎて林間の翮に慚づ」と、懶と拙とを遂げたいと思いつつもそれがかなわぬことを詠うのも、またそうである。

最晩年の大曆四年以後の「拙」字は、全く、處世が拙いという否定的な意味で用いられている。岳州から湘水を溯るとき詩・「上水遣懷」詩（大曆四年春の作）では、「我太平の時に衰へ 身戎馬の後に病む 踰躑拙爲多く 安んぞ皓首ならざるを得ん」と、詩の詠い出しにおいてこれまでの生涯を回顧しているが、のろのろと疲れた足をひきずって、拙い營みばかりであったと、自己の營爲のまずさそのものを「拙」と表現している。「拙計銅柱に泥む」（詠懷）詩・第二首・大曆四年春の作、「拙計百寮の下」（湘江宴・餞裴二端公赴道州）詩・大曆四年夏の作、「養拙江湖の外」（酬韋韶州見寄）詩・大曆四年秋の作、「生理飄蕩に拙なり」（登舟將漢陽）詩・大曆五年秋の作）などの詩句は、いず

杜甫における「懶」と「拙」（安東後六）

れも、營爲のまずさを「拙」と表現したもので、最晩年の用法は、全く否定的である。

先にも述べたとおり、杜甫は、生涯にわたって、離俗の願いを詠い續けている。そして「懶」字「拙」字に離俗の主張を詠い込める一方では、同時に、自らの性格をものぐさであるとして「懶」と表現し、處世においてはいかにも營爲がつたない、それを「拙」と表現している。つまり、杜甫にあっては、この場合、「懶」「拙」の否定的なとらえ方から一歩歩を進めて、離俗の主張へと向ったとか、あるいは、迷いから脱却して、本性に適合した無碍の世界に跳入できたとかいった、直線的に一方向へ歸着するというかたちではない。いわば、両者が常に混在しているのであって、それが杜甫の生涯を通じて、兩極端の發言となつてあらわれている。

三

杜甫には、常に、二律背反した兩極端の發言が目立つ。杜甫は、それを自覺してのことであつたか、全く無頓着であつたか、ほとんど拘泥したという様子は見えない。

子供の教育に關していえば、「熟精せよ文選の理」(「宗武生日」詩)と、吾が子に學問を奨めた發言の一方には、「失學兒の懶に従ふ」(「屏跡」詩第三首)と、すこぶるなげやりな發言もある。また、文學に關していえば、周く知られる詩句「語人を驚かさずんば死すとも休まず」(「江上值水如海勢聊短述」詩)や「文章千古の事」(「偶題」詩)のように文學を讚美し、「詩是れ吾家の事」(「宗武生日」詩)と祖父杜審言の文名を誇つてみせるかともれば、「文章」小技 道に於て未だ尊しと爲さず」(「貽華楊柳小府」詩)や「名は豈に文章もて著はれんや」(「旅夜書懷」詩)など

のように、文學を一小技として斥けた發言をしている。もっとも、子供の勉強ぎらいを放っておくというのは、陶淵明を意識しての表現であろうし、また、文章を一小技として斥けるのは、揚雄や曹植を意識しての表現であろうから、幾分かの割り引きをして考えねばならないであろう。

しかし、出仕して政治に參與するか、退いて離俗の隱棲に安んずるかという行藏の選擇については、背反した發言は、分裂的であるとさえ言える。杜甫が、終生離俗の願いを詩に詠いつづけていることは、すでに述べたとおりであるが、時には、自らのよって立つ儒者の立場をさえ否定して、「儒術我に於て何か有らんや 孔丘盜跖俱に塵埃」〔「醉時歌」〕といった放言とも言える發言も平氣でしている。ところがその一方では、時用に切でないとはいっても、高邁な政治理念を懷いて、「君を堯舜の上に致して 再び風俗をして淳ならしめん」〔「奉贈韋左丞丈人」詩〕ことを願ひ、果ては、「身は許す麒麟に畫かるるを」〔「秋野」詩第五首〕とまで、功名の高く著われるのを夢みている。

ところで、こうした兩極端の發言の裏面に付きまとうのが、辯解がましきである。杜甫は辯解の多い人であつて、くりかえしそれを言う。出處行藏について、どのように言っているかというに、「濟世の策を陳べんと欲するも 已に老いたり尙書郎 息まず豺狼の鬪ひ 空しく慙づ鴛鴦の行」〔「暮春題瀼西新賃草屋」詩第五首〕や「報主身已に老ゆ 入朝病みて妨げらる」〔「入衡州」詩〕のように、君恩に報いる爲には濟世の策を獻じたいと思うが、檢校工部員外郎のこの身も年老い衰え病んで、兵馬の塵もおさまらぬ世に漂泊の身では、とてもお役に立てないと、世の擾亂・老衰・病氣を因由としてあげて辯解する。一方退隱が遂げられぬことについては、どのように言うかというに、「艱難世事迫り、隱遁佳期に後る」〔「大雲寺贊公房」詩第四首〕や、「白頭幕府に趨り、深く覺ゆ平生に負くを」〔「正月三日歸

杜甫における「懶」と「拙」(安東俊六)

溪上有作、簡院內諸公」詩)のように、世事の艱難に迫られたり、嚴武の情誼に報いるために幕府勤めをしたことが、隱遁を妨げた因由としてあげられている。

なるほど、杜甫が天寶の世の擾亂に遭遇したことは、不運であつたと言える。そのために經濟的には逼迫し、生活の場を求めて漂泊のうちに後半生を送らねばならなかつたのも、それが大きく預っている。また四川では、徐知道の反亂や吐蕃の侵寇にも遭遇して、兵馬の塵の中に生活が脅かされ續けたのは否めない事實である。また病いに冒されていたことも事實で、持病となつていた瘡瘍、肺疾の他に、風痺や消渴も加つて、耳は聾し、齒も抜け落ちている。このような、いわば、杜甫自身の力ではいかんともし難い、他律的とも言える因由によつて、杜甫の政治參與への道が閉され、著しい制約をうけたことは事實であつて、それをいちいち辯解がましいといふのは酷で、當らないであろう。しかし退隱が妨げられた事由に、世事の艱難や情誼に報いるための仕官があげられるのは、どういふことであろうか。隱逸生活に入る爲の基本的要件は、世俗との交わりを遮斷することである。それをぬきにしては隱逸生活は成り立ち得ない。それは、ただ單に、交わりを斷つという外面上の行爲ばかりでなく、内的に俗世への眷戀を斷ち切ることを必須の要件とする。それを、世事に關心を抱いていたのでは、退隱が遂げられようはずがない。杜甫が、内的な精神活動に關るものに、外的な要因を安易に障害としてもち込む例は、他にもみられる。端的な例が、佛教に對する對應の仕方である。⁽¹⁾「未だ妻子を割く能はず」(「謁眞諦寺禪師」詩)や「勇猛心の極と爲すも清羸體の辱きに任す」(「秋日夔府詠懷」詩)のように、妻子を捨てられないから、體が弱いから、求道の道に進めなという。なるほど、獨り身はほだしがなく、健康な體は修業の苦行には適しているであろう。しかし、求道という

内的な活動にとつて、それらは枝葉にすぎず、求道を阻害するものとはなり得ないはずである。

杜甫のこうした辯解がまじさが、多くの詩を生んでいるとは、言えぬであろうか。

杜甫は、弟妹のことをしばしば詩に詠っている。手紙が届いたといつては喜び、近ごろ消息がないといつては心配している。月夜に思い、野望しては、登高しては、逝く春を傷んでは思っている。それは、生涯にわたつて絶えず杜甫の詩に見られるもので、従来言われてきたように、杜甫は弟妹思いの愛に篤い兄であるということになる。しかしそれは裏をかえせば、動亂の世に、何も援護の手をさしのべてやれぬ無力な兄の慚愧の表出という側面ものぞくのであつて、多く詠うことが一概に愛情の篤さとばかりは言い切れない。成都で作つた詩に、「干戈猶ほ未だ定らず 弟妹各々何くに之く」(「遣興」詩)、「兄弟分離苦しむ 形容老病催す」(「送舍弟穎赴齊州」詩第二首)と詠い、大曆五年潭州で作つた詩にも、「弟姪存すと雖も書を得ず 干戈未だ息まず離居に苦しむ」(「清明」詩)と詠つて、ここでも世の擾亂と老衰と病氣が顔をのぞかせ、成都から潭州にかけていかに杜甫をとりまく情況が好轉していかないからといつても、あまりにも表現が定型化しきつてゐることは否定しがたい。

既に述べた、出仕して政治に參與したいという願ひも、退いて隱逸生活にひたろうとする欲求も、矛盾ながらそのいづれにも眷戀しつゝ、世の擾亂と老衰・病氣が妨げると辯解して、遂げられようのない思いを、綿々と繰り返して詠い續けるのである。

杜甫が「懶」といい「拙」といふものの實體は、これではなからうか。かつて、私は、杜甫は固定化した思考の形態を持つてゐることを述べたが、この型にはまった思考のどうどうめぐりの中で、思考は進展せぬままに、詩に

それをくり返しくり返し綿々と詠うことにしか方途を見出しえなかった杜甫が、問題解決の端緒さえつかめないまま思考を停止する自分の優柔さ、それが形にあらわれた場合の營爲のつたなさ、それを「懶」と感じ「拙」と表現せざるを得なかったのではなかったか。

杜甫は讚美と否定をくりかえす。高邁な政治理念を抱いて、出でて政治に參與することを讚美する。しかし一方では、それを否定して、退藏して隱逸生活にひたることを讚美する。いうまでもなく、政治參與を讚美するかぎりにおいては、隱逸は斥けられる。杜甫が否定しないものは何もない。終生親しんだ酒も、また詩までも否定する。

「夔府書懷」詩の冒頭の部分をみてみよう。

昔罷河西尉 昔河西の尉を罷めしとき

初與薊北師 初めて薊北の師與る。

不才名位晚 不才名位晚きも

敢恨省郎遲 敢て恨んや省郎の遲きと

扈聖睦峒日 聖に扈す睦峒の日

端居澗瀕時 端居す澗瀕の時

萍流仍汲引 萍流仍ほ汲引せられ

樗散尙恩慈 樗散尙ほ恩慈あり

遂阻雲台宿 遂に雲台の宿を阻て

常懷淇露詩

常に淇露の詩を懷ふ

翠華森遠矣

翠華森として遠く

白首颯淒其

白首颯として淒たり

拙被林泉滯

拙にして林泉に滯せしめられ

生逢酒賦欺

生まれて酒賦の欺きに逢ふ

文園終寂寞

文園終に寂寞

漢閣自磷緇

漢閣自ら磷緇

病隔君臣議

病んで隔たる君臣の議

慚紆德澤私

慚づらくは德澤の私を紆らさるること

揚鑣驚主辱

鑣を揚ぐ主辱に驚くに

拔劍撥年衰

劍を抜く年衰を撥くに

この詩のこの部分には、上來述べてきたような杜甫の全てが顔をのぞかせているといえる。世の擾亂に遭遇したこと、漂泊の身であること、老年にして病み衰えていること、しかしなお檢校工部員外郎であることには誇りと責任を感じ、宮中に宿直したことも御宴に列したことも懐しく思い出している。そしてかつて自分が中央に文才を認められたことも忘れてはいない。ただここには隱棲を讚美した部分がないが、この詩の末尾の部分には、讚美とまでは言えぬまでも、「月を賞でて秋桂に延き 傾陽露萎を逐ふ」という表現がみえる。

杜甫における「懶」と「拙」(安東俊六)

ここにいみじくも、「拙にして林泉に滞せしめられ 生まれて酒賦の欺きに逢ふ」と詠っているのは、否定に否定を重ねて、何物も残らず、酒も詩も否定して、結局何ものにも心を寄せるところがなくなっている自分を、「拙」だと否定的に表現するほかなかったことを露呈したものである。

結 び

「懶」と「拙」とは、詮ずる所、根底では同じものを違った角度から表現した言葉に他ならない。ただ、「懶」字は性格としての部面を強調した場合に用い、「拙」字は行爲として外に現われたものの結果を言う場合に用いているといえる。したがって、「懶」字が、秦州・成都の詩に多く用いられて主張が込められているのに對して、「拙」字が、逆に、秦州・成都の詩に用いられることが少なく、否定的な意味で用いられているのは、「懶」字は私淑する嵇康の「性復た疎懶」を襲いえても、行爲の結果として現れたものがつたないと認めざるを得ずに用いる「拙」字のほうは、自ら否定的な用法となつて、不遇をかこち詠った時期に偏りをみせることになるのである。

(五七・六・八)

注

(1) 詳細については、拙論「杜甫の思考形態と詩作」(『文學研究』第七十輯所收)を参照願いたい。

(2) 注(1)に掲げた拙論。